人文科学研究　No.10, pp.111-121　　March 2014

心的用語の理解と過去のエピソードの語りの発達的関係

―縦断的な事例データによる予備的検討―

上　原　　泉

要旨

本研究では，子どもが過去の出来事を過去形で話し始める時期（エピソード報告開始時期）と，複数の言語的な認知発達の指標との時間的関係性について，縦断的な事例調査により検討した。その結果，二語発話の初出時期は 1 歳半から 2 歳頃であったが，エピソード報告開始時期は 2 歳半から 3 歳頃であることが示された。また，エピソード報告開始時期は，「知る」を自発的に使用し始める時期と近い一方，「怖い」の理解に達する時期や「覚える（もしくは，忘れる）」を自発的に使用し始める時期よりは早いことが示された。幼児の過去のエピソード報告は，過去の経験の想起意識に基づいているのか否かがこれまで議論になってきたが，本論文では，本結果を踏まえて，「覚える（もしくは，忘れる）」や「怖い」への理解が充分でない 3 歳頃までの幼児は，過去の出来事に関連する手がかりを見聞きしたときに，自分が過去に経験したという想起意識を伴わずに，「知っている」内容を断片的に話しているのではないかと考察した。指標の追加と，詳細な分析に基づく発達的関係性の追究が今後の課題である。

問題

過去の個人的な出来事の記憶（いつ，どこで，何をしたかに関する記憶）をエピソード記憶というが，そのうち，特に自分史の一部をなすような出来事の記憶（単一の出来事というよりは，出来事を集積したような総体的な記憶も含む）のことを自伝的記憶という。自伝的記憶は幼児期後期に発達するといわれている（e.g., Nelson & Fivush, 2004; Perner & Ruffman, 1995）。自伝的記憶の発達に関して，過去を語るための独特の語り口（narrative，ナラティブ）の獲得が重視されてきた（e.g.,Fivush, 2011; Reese, 2009）。また，他の複数の認知能力の発達との関連も考察されてきた。ナラティブの発達については，母親を中心とする周囲との社会的相互作用に焦点があてられ，母親による過去の語り方や語る量が子どもの語り方や語る量に影響するという知見が積み重ねられてきた（e.g.,Fivush, 2011; Reese, 2009）。自伝的記憶の発達に関連する認知能力として，言語能力（e.g., Simock & Hayne, 2003），心の理論（e.g., Perner, Kloo, & Gopnik, 2007），自己認識（そのうち特に認知的自己）（e.g., Howe & Courage, 1997）に焦点があてられ，その関係性が検討されてきた。これらの研究から，ナラティブ自体の発達過程と周囲の語りかけの関連性が明らかになりつつあるが，自伝的記憶やその語りと諸認知能力の発達との関係性については，一部で関連が示唆されているものの，不明な点が多い。他の認知能力との横断的な関連性の追究とともに，個人内での複数の認知指標と自伝的記憶の語りの縦断的な発達的関連性の追究により明らか

になる点が多いのではないかと思われる。

自伝的記憶の発達やナラティブの獲得は幼児期後期だとしても，そもそも，子どもはいつ頃から過去の出来事を話すようになるのか。2歳頃から子どもは出来事を過去形で話すようになるといわれてきたが（Eisenberg, 1985; Tager-Flusberg, 1989），実証的に追究した研究は，筆者の知る限り，上原（1998）以外ではほぼ見当たらない。したがって，過去の出来事を話すようになることに，諸認知能力の発達がどう関わっているかも追究されてこなかった。ほぼ唯一，上原（1998）で初語や再認との関係性を検討しているものの，研究目的は異なっていたため，言語的な認知発達の指標数は少なく，諸認知能力の発達との関係性を示唆するには至らなかった。このような研究状況のなか，まず，子どもが過去の出来事を「・・した」と過去形で話すようになるのに，どのような言語的な認知発達が関係しているかを探る必要があると考え，本研究を計画した。子どもが過去の出来事を話し始める時期をとらえるのは横断的な手法では難しいこと，また，過去を報告し始める時期と他の言語指標との個人内における関係性も横断的な手法では明らかにしにくいことから，縦断的な手法による追究が適切と考えた。

そこで，本研究は，先に開始した，出来事の記憶量や記憶内容に関する縦断的な事例調査を拡張する形で，新たな言語的な認知発達の指標を複数とることにより，過去の出来事の報告が可能になることに他の言語的な認知発達がどう関係しているかを調べることにした。具体的には，子どもが過去のエピソードを過去形で自発的に話し始める時期（エピソード報告開始時期：上原，1998; 2003; 2008a; 2008b）と，複数の言語的な発達指標間との時期的関係性を明らかにすることを本研究の目的とした。エピソード報告開始時期と比較するのに，本研究では以下の言語的な発達指標をとることにした。一般的な言語発達の指標として，初語，二語発話の出現時期を特定した。感情に関する心的用語の理解の指標として，「怖い」を心的状況を表す言葉として理解するようになった時期を特定した。また，知識や記憶に関する心的用語の理解の指標として，「知る」と「覚える（もしくは，忘れる）」（上原，2003; 2008a; 2008b）を自発的に表出するようになった時期を特定した。なお，「怖い」について自発的に表出するようになった時期を指標としなかったのは，感情語は「怖い」ライオン，「怖い」人などと事物や人を形容する形でも使用可能なため，自発的に使用し始めたからといって，心的用語として子どもが理解している可能性が決して高くはないと考えたからである。そのため「怖い」については，理解し始めた時点を，課題により特定することにした。

自伝的記憶（や過去の出来事の報告）の発達との関係において，従来ほとんど検討されてこなかった，心的用語に焦点をあてたのは，まず，体験時の気持ちや感情を含めて内的に再現し語れるようになるためには，感情などの心的状況を表す表現を理解し自らも表出できるようなっていなければならず，心的用語の理解が自伝的記憶やその語りの発達に関わっていると考えたからである。また，自伝的記憶の発達の基本的な前提として，過去の体験に関する自己の記憶を意識的に振り返ることができるようになっている必要があり，自己の知識状況や記憶状況を表す言葉，すなわち「知る」や「覚える（忘れる）」の表出や理解の有無により，自己の記憶への認識レベルについてある程度推測できるのではないかと考えたからである。これらの関係性を縦断的に検討した研究は見当たらない。なお，心的用語の理解の発達過程自体，まだ明らかでない点が多く，感情語や「知る」「覚える（忘れる）」の使用と理解到達時期に関しても，研究間で結果は一致していない。感情語，「知る」「覚える（忘れる）」を中心に，心的用語の発達に関する従来の知見を簡単に概観する。

心的用語のうち，「熱い」「痛い」等の感覚語の使用は2歳頃からと早い傾向にあるが，感情語や，「知る」「覚える（忘れる）」を含む認知語や思考状態語の使用は（「知る」はこのなかでは若干早いものの），3，4

歳頃からと比較的遅いことが知られている（Bartsch & Wellman, 1995; Bretherton & Beeghly, 1982; Brown & Dunn, 1992; Shatz, Wellman, & Silber, 1983）。ただし，英語の場合，“I remember that…” “You know,”等の形で発言の開始時やつなぎの言葉として使用可能な「知る」「覚える（忘れる）」を中心に，子どもが心的用語の意味を本当に理解して使用しているのかがよく議論になる（Cherney, 2003; Johnson & Wellman, 1980; Limber, 1973; Miscione, Marvin, O'Brien, & Greenberg, 1978）。このうち，know（知る）の理解については，会話分析や課題（例えば「物を隠す課題」）により，比較的調べられてきたが（e.g, Bartsch &Wellman, 1995; Flavell, 1999; Moore, Bryant, & Furrow, 1989; Moore, Furrow, Chaisson, & Patriquin, 1994），remember（覚える）やforget（忘れる）の理解に関する検討は少ない。英語の知見を概観すると，子どもがこれらの用語を心的状況を表す言葉として理解し始める年齢は，3，4歳台から児童期と，分析法や課題の違いにより差がある。

日本語における，感情語や「知る」「覚える（忘れる）」を含む，心的用語の発達に関する知見はさらに少ない。日本語の「知る」「覚える（忘れる）」は，英語と異なり，“I remember that…”“You know,”等の表現はなく，会話のつなぎの言葉として使用される可能性は低いため，自発的に表出されていれば比較的理解されている可能性が高いと思われる（上原，2003）。従来，日本語の心的用語の発達状況を調べるのに，遊び場面等における自発的な表出頻度をカウントする方法がとられてきた（岩田，1999; 2013; 園田，1999; 園田・無藤，1996）。ただし，限られた調査回数と観察時間内で，子どもが自発的に使用する頻度が低いためか，感情語は「感情語」として，「知る」や「覚える（忘れる）」は「認知語」もしくは「思考状態言葉」として，関連する語とひとくくりでその使用頻度が分析されてきた。齋藤（2000）が「知る」の理解に焦点をあて，ストーリーを使った課題を考案しているが，個々の心的用語の初出時期や理解の度合いを調べている研究は僅少である。本研究で，「怖い」「知る」「覚える（忘れる）」の発達を検討するのは，過去の出来事を報告できるようになることとの関係性をみるのが主目的だが，日本語におけるこれらの心的用語の発達過程を調べること自体に学術的な意義があると思われる。

最後に，感情語のうち「怖い」を選んで調べた理由について簡単に述べておく（詳細については，上原，2002; 2003を参照）。感情語として「怖い」を選んだのは，「怖い」という語のみがもつ特徴からである。単独で用いて感情を表現する言葉であると同時に，「怖い」ライオン，「怖い」人というように事物や人を形容する言葉である点は，「楽しい」等の他の感情語と同様であるが，顔の表情を材料とした場合，人が「怖い」と感じる他者の表情と，人が「怖い」ときに表出する表情とが顕著に異なるという特徴を持つ（「楽しい」「嬉しい」等は2つの表情に差がない）。この特徴があるため，表情カードを使って，「怖い人は誰か」と「『怖い』と言う人は誰か」という質問に対する子どもの反応をみることで，（心的状況を表す言葉としてではなく）事物や人を形容する言葉として理解している可能性の有無を探りやすいと思われた。子どもが「怖い」という言葉を「怖い」ライオン，「怖い」人というように完全に事物を形容する言葉として理解しているとしたら，あるいは，もっぱら事物の形容語として理解しているわけではないとしても「怖い」という言葉を人一般の心的状況を表すということを理解していないならば，「怖い人」の判断は可能だが「『怖い』と言う人」を判断することは困難であると推測されたからである。

方法

参加者

8人（男児4人［A～D］，女児4人［E～H］）の子どもとその母親に，1，2歳頃から長期的にイン

タビュー調査に参加いただいた（参加時期は図２を参照）。調査の概要と実施方法に関して，母親の同意を得たうえで同意書への署名をいただき，調査を実施した。本論文では，参加開始時点から４歳半頃までの分析結果を紹介する。

なお，本調査は，先に開始した記憶の縦断的調査に，途中から調査項目を追加し併行して実施したものである。５人（男児１人と女児４人）は上原（1998）の調査開始時から参加しており，そこで得た初語のデータを本調査の分析にも利用している。また，エピソード報告開始時期の特定の際にも，そのときの発話データを利用しているが，本研究では特定法を改め，再分析を行っている。

手続き

調査者１人（筆者）が，調査と分析をすべて行った。母子へのインタビュー調査を数ヵ月に１回の頻度で行った（インタビュー実施法の詳細については，上原，1998；2003も参照されたい）。インタビューの実施場所は，母親の希望に沿い，研究室もしくは参加者宅であった。母子同席のもと調査を実施したが，最初に子どもへのインタビューと課題を実施し，その後，母親へのインタビューを行った。１回のインタビューは，子どもに対するインタビュー・課題実施と母親に対するインタビュー，短い休憩（必要に応じた回数）からなり，あわせて２時間程度（１～３時間）であった。子どもにインタビューや課題を実施している最中は，調査者が補助や助言をもとめない限り，子どもへの補助や助言は行わないよう，母親にお願いした。子どもに対するインタビューは，ブロック等での遊びを交えながら行った。子どもが過去の出来事を話すのかを確認するため，過去に関する話題を必ず数点含めるようにし，子どもと調査者が，一緒に遊びながら話をした。チェックすべき言語の表出（“覚える”の発話など）や報告（過去に関する報告など）がみられたときに，可能な範囲内で，後の分析を行いやすくするため，メモをとった。インタビューを実施中に，タイミングをみて（子どもの機嫌，インタビューへの応答もよく，課題が行いやすい状況になったときに），数分程度の表情課題（「怖い」をどれくらい理解しているかを調べるための課題）を実施した。母親へのインタビューでは，子どもの発言やチェックリストに記載されている内容の確認や情報の補足をもとめた。母親の許可を得て，インタビューと課題の実施中，録画と録音を行った。本調査に該当する部分の発話を発されたとおりに文字化し，発話データとして，一部指標に関する時期特定の際に使用した。

母親に，毎インタビュー時に主に記憶と言語発達に関する質問からなるチェックリストを渡し，次のインタビュー時に記入したものの提出をもとめた。本論文内容に該当するチェックリスト内の項目は，上原（1998; 2003）で使用した項目（過去のエピソードを話すか否かを問い，語る場合に具体例の記述をもとめる項目，その語り方を選択肢から選ばせる項目，「覚える」「忘れる」を話すか否かを問い，話す場合に具体例の記述をもとめる項目，二語発話をするか否かを問い，話す場合は具体例の記述をもとめる項目，初語と初語時期に関する項目）に加え，「怖い」などの感情語を話すか否かを問い，話す場合は具体例の記述をもとめる項目，「知る」を話すか否かを問い，話す場合に具体例の記述をもとめる項目であった。母親には，チェックリスト内の項目内容が，日常的にみられるかを気に留めていただき，できる限り具体的に記入していただくようお願いした。

本調査では，以下のとおり，「怖い」を心的状況を表す言葉として理解し始めた時期と，５つの言語を表出し始めた時期を特定した。

１.「怖い」を人の心的状況を表す言葉として理解し始めた時期
２．初語時期
３．二語発話（自立単語を２つつなげて話す）を始めた時期

4．過去のエピソードを過去形で自発的に話し始めた時期

5.「知る」を自発的に話し始めた時期

6.「覚える」または「忘れる（記憶していることを忘れる意味）」を自発的に話し始めた時期

6つの時期の特定法を順に述べる。1.については，表情課題を毎インタビュー時に実施し，その課題を通過した時点を「怖い」を理解し始めた時期として特定した。表情課題は，上原（2002; 2003）で使用された，人の表情の絵カード6種類から成る課題であった（各子どもで実施した時期については図1を参照）。課題の概要は次のとおりである。「笑顔」「怒る顔」「悲しみを表す顔」「驚きを表す顔」「怖がる顔」「泣く顔」の6種類の感情を表現する顔の絵カード計6枚を子どもに提示し，「怖い人は誰ですか？」「『怖いよー』と言っている人は誰ですか？」と質問し指さしにより答えてもらった。2つの質問はランダムな順で行った。子どもの反応に対して，正答か否かのフィードバックは与えなかった。「怖がる顔」の絵については，他の表情と同様に判断しやすくするために「怖がる顔」の横にお化けの絵も書かれ，怖がっている状況が伝わりやすい絵となっていた。成人への予備調査に基づき，「怖い人は誰ですか？」という質問に対する正答は「怒る顔」のみであったが，「『怖いよー』と言っている人は誰ですか？」という質問に対する正答は，「怖がる顔」もしくは「泣く顔」を選択した場合とした。2つの質問に安定して正答するようになった時点を，「怖い」を感情語として理解するようになった時点とみなした。

2.については，調査開始時点で既に大方の子どもが言葉を話し始めていたため，チェックリスト内の記述やインタビュー中の母親の証言に基づいて特定した（上原，1998）。また，全員の子どもについて，母子手帳に初語が記録されていたことを，母親の証言から確認した。3.についても，調査開始時点で既に二語発話の開始時期を通過していた子どもが2人いたが，チェックリスト内の記述，母子手帳の記録，インタビュー中の母親の証言に基づいて特定した。調査開始時にまだ二語発話をしていなかった6人の子どもについても，チェックリストの記述と母親の証言に基づいて特定した。すなわち，具体例を伴って「語った」と初めてチェックリスト上に記述され，かつ，その直後の提出時のインタビューでそのときの状況を確認できた場合を初出時期として特定した。なお，インタビュー時の発話データによる確認も行ったが，チェックリスト上の記述，母親の証言とのずれはほぼなかった。4.も3.と同様に特定した。なお，4.についてはインタビュー中の発話データ内での初出時期より母親のチェックリスト上の記述や証言による初出時期のほうが少し早い傾向にあったが，過去の出来事の発言が幼児期初期はなかなかみられない点を考慮し，従来の特定法（上原，1998; 2003; 2008a; 2008b）を改め，（「怖い」を除く）他の言語指標の特定法にあわせ，チェックリスト上の記述，母親の証言に基づいて特定した。5，6についても，3.と同様にチェックリスト上の記述，母親の証言に基づいて特定した。5，6についても，発話データ内での初出時期とほぼ差がなかった。4，5，6のいずれも，オウム返しではなく，自発的に適切に（間違った使い方ではなく）使用され始めた時期を特定した。

結果と考察

「怖い」を理解し始める時期

毎インタビュー時に実施した，表情カードを使った課題への成績の変遷過程，すなわち課題通過に至るまでの反応の変遷過程を示したのが図1である。図1では，実線上に記した成績が「怖い人」に対する判断を，点線上に記した成績が「『怖いよー』と言っている人」に対する判断を示している。すべての子どもにおいて「怖い人」は3歳前から正しく答えており，一度正答になるとそれ以降のすべてのインタビュー

において正しく答えている。課題実施開始時点か開始から間もない時点から，「怖い人」については正答に達しており，ほとんど間違えていない。一方，「『怖いよー』と言っている人」は，一度正しく答えたとしても，次のインタビュー時以降，正しく答えられていないケースがある（A，B，F，H参照）。しかし，どの子どもにおいても，続く２回のインタビューで正しく答えられると，その後のインタビューで間違えることはなかった。最初に正しく答えた時点も，持続的に正しく答えられるようになった時点のいずれも，「怖い人」を判断できるようになった時期よりも遅い。「『怖いよー』と言っている人」の誤答として，「怖い人」と同じ「怒る顔」を選ぶ割合が圧倒的に高かった。

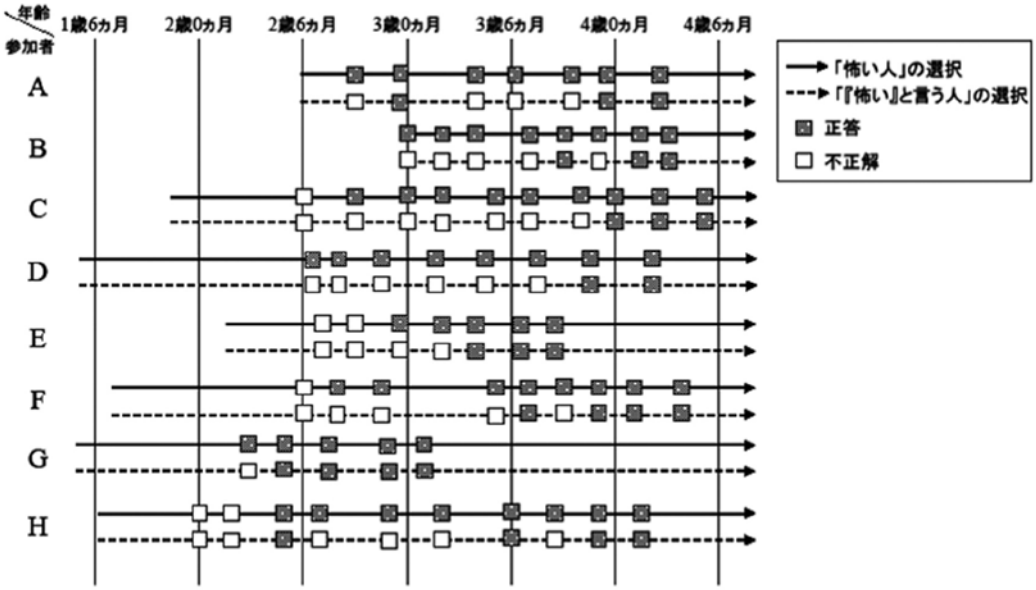

図１：「怖い」人と「『怖い』と言う人」の選択の発達変化

なぜ，「『怖いよー』と言っている人」は，一度正しく答えたとしても，次のインタビュー時以降に必ずしも正しく答えられていないケースが複数あるのか。早期の正答については，偶然正答した可能性が考えられる。６枚のカードから偶然の確率で選んでも１/６の割合で正答する可能性があるうえ，子どもが先に「怖い人」を質問され正しく選んだ後で，異なる質問に対しては異なる絵を選ぶべきと考えた場合は，１/５の偶然の確率で正答する可能性がある。２回続くインタビューで正答するとその後のインタビューでは間違えることがなかったことから一度正しく答えたとしても，次のインタビュー時以降は必ずしも正しく答えられていないケースは，理解に達していないとみなすのが妥当であり，「『怖いよー』と言っている人」を連続して正答するようになった時期の最初の時点を，理解して答えられるようになったとみなすのが妥当と判断した。

結果は次のようにまとめられる。「怖い人」の判断のほうが「『怖いよー』と言っている人」の判断より早くできるようになり，「怖い人」の判断は２歳台から可能になるのに対して，「『怖いよー』と言っている人」の判断は，（１人の２歳半前をのぞいて）３歳半以降４歳頃に可能になっている。これは何を意味するのか。当初推測していたとおり，最初のうち（２歳台）は，完全に事物や人を形容する言葉として理解している可能性が考えられる。では，「『怖いよー』と言っている人」の判断が安定して可能になり始め

る３歳半以降４歳頃の時期をどうとらえればよいか。この時期に「怖い」を人の心的状況を指す言葉として理解するようになるとの見解が可能な一方，この時期は他者の心的状況を推測できるようになる時点であって，自分の心的状況を指す言葉としての理解はもう少し早いはずだという解釈も可能かもしれない。要は“心的状況を指す言葉としての理解”をどうとらえるかによるだろう。この時期は，誤信念課題の通過年齢帯（Wimmer & Perner, 1983 他多数）と一致している。他者の感情の推測が可能となり，“自分のみならず人一般の心的状況”を表す言葉として「怖い」を理解するようになるのが，３歳半以降４歳頃の時期といってよいのではなかろうか。この時点を，成人と同様の理解に達した時点と本論文ではみなし図２に示した。

６つの指標の時期的関係

各子どもにおける６つの時期を示したのが図２である。どの子どもにおいても，最初に初語，次に二語発話が出現した。初語は１人（G）の７ヵ月をのぞいて，５人（A，B，D，F，H）において１歳から１歳３ヵ月の間，２人（C，E）において１歳半に出現した。二語発話の出現時期は，３人（A，G，H）で１歳半前後，１人（D）で１歳９ヵ月頃，４人（B，C，E，F）において２歳頃であった。これらの出現時期は，従来の知見とほぼ一致している。二語発話に続いて，３番目に出現したのが，６人（B，D，E，F，G，H）の子どもにおいてはエピソード報告，２人（A，C）の子どもにおいては「知る」の自発的な使用であった。４番目に出現したのが，３番目がエピソード報告であった６人において「知る」の自発的な使用（Gでは「怖い」の理解到達時期でもある），３番目が「知る」の自発的な使用であった２

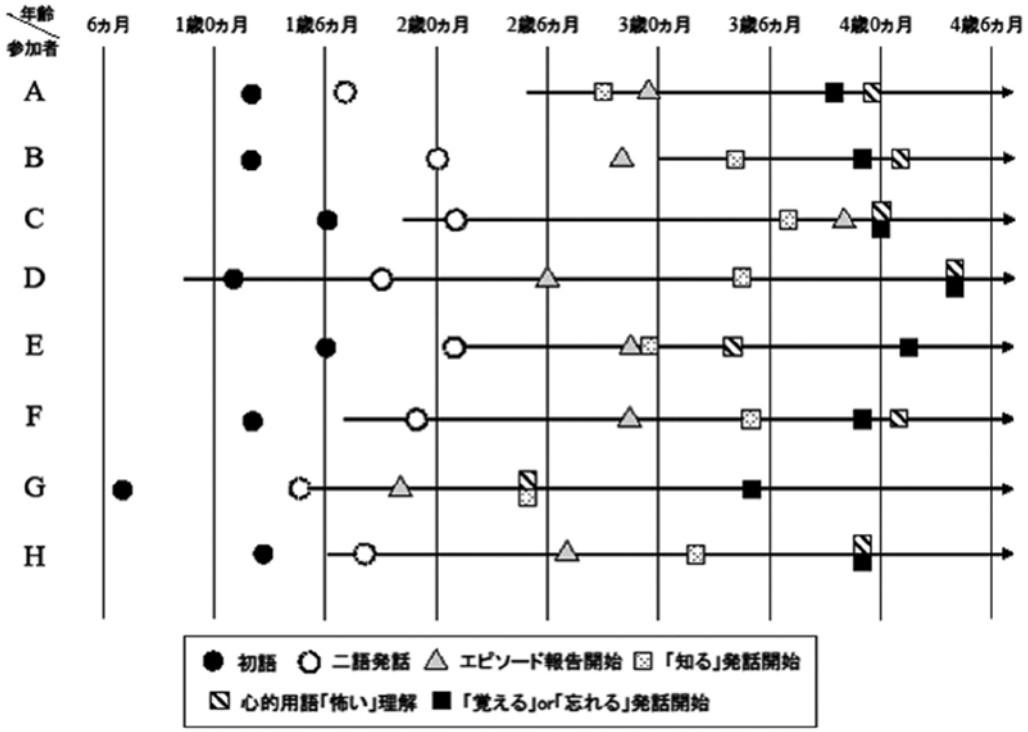

図２：６つの発達指標の時期

人においてエピソード報告であった。つまり，二語発話の後に，エピソード報告，「知る」の自発的使用（ときとして逆の順にもなりうる）が続くことが示されている。時期としては，エピソード報告開始時期は，１人（G）において２歳前，別の１人（C）において４歳前であったが，他の６人においては２歳半から３歳の間であった。「知る」の自発的使用は，１人（G）において２歳半前，別の１人（A）においては２歳９ヵ月，残りの６人おいては３歳頃から３歳半過ぎまでの間であった。５番目，６番目に続くのが，「覚える（もしくは，忘れる)」の自発的使用の開始と，心的用語「怖い」の理解到達であった。３人（A，B，F）において５番目が「覚える（もしくは，忘れる)」の自発的使用であったが，２人（E，G）においては「怖い」の理解到達（Gでは「知る」の自発的使用開始時期に重なる）のほうが早く，残りの３人（C，D，H）においては，この２つはまったく同じ時期であった。この２つが可能になる時期は発達的に近いことが示されている。１人（G）の３歳５ヵ月をのぞいて，３歳９ヵ月より後から４歳４ヵ月までの間の時期に「覚える（もしくは，忘れる)」が自発的に使用され始めていた。「怖い」課題の通過は，１人（G）が「知る」の自発的発話と同じく２歳５ヵ月と早く，別の１人（E）においても３歳半より前と早かったが，残りの６人においては，４歳前から４歳４ヵ月までの間の時期であった。

全体としてみると，個人差はあるものの，６指標がある一定の発達の順序性をもって出現する可能性が示されている。また，初語，二語発話の出現時期，「覚える（もしくは，忘れる)」の自発的使用の開始時期は，大方，一定の半年以内の範囲内におさまっている点が興味深い。「怖い」の理解に達する時期も（２人をのぞいて）半年の範囲内におさまっている。エピソード報告と「知る」の自発的使用の開始時期において，比較的個人差がみられる。さらに，１人（G）において，すべての指標の出現時期が早かった以外は，初語や二語発話の出現が早いほど，残りの指標の出現が早い等の目立った関係性は見出されない。指標間の出現時期の間隔は個人差が大きいことがみてとれる。いずれにせよ，基本的な言語発達がすすむと，過去の文体で「・・した」と過去の報告を始めたり，「知る」という自己の知識状況を報告するようになり，その後，「覚える（もしくは，忘れる)」の自発的使用や，「怖い」を人一般の心的状況を指す言葉として理解が可能になるという発達の順序性があることが示唆された。

総合考察

心的用語の発達過程

心的用語の発達過程の検討は本研究の主目的ではないが，従来ほとんど追究されてこなかった内容であり，この点に関する貴重なデータを得たので，最初に少し考察したい。本研究では，欲求に関する語や感覚語よりは表出が遅いといわれる，感情語と認知語から３語を選んで，ある一定の理解に達して使用され始めた時期を特定した。「知る」は３歳前後と早かったものの，残り２つの語の理解到達時期は４歳前後と近かった。「覚える（もしくは，忘れる)」という記憶状況を表す語と，(「怖い」一語のみだが）感情語の理解到達時期が近いという結果は，要求や感覚を表す語を除く一定の範囲の心的用語群において，理解の前提となる認知能力が，ある程度共有されている可能性を示唆するものと思われる。また，英語と言語構造が異なり，英語の知見間でも多少ばらつきがあるため，そう簡単に比較はできないものの，今回，日本語で示された，これらの用語の適切な使用が始まる年齢帯は，英語圏と大きな隔たりはないようにみうけられた。心的用語の発達には，言語の違いを超え，心的状況の理解の発達が共通して関わっているのではないかと推測される。従来，心的状況の理解の発達については，もっぱら，心の理論に関する課題で検討され，日本語幼児で発達が遅い可能性が論じられてきたが（e.g., Wellman, Cross, & Watson, 2001),

心の理論のみならず，心的用語の発達過程も含めて追究することで，心的状況の理解の発達と言語間の発達差についてさらなる理解が進むのではないかと考える。

エピソードの語りと５つの指標の関係

次に，本研究の主目的の結果について考察していく。自伝的記憶は幼児期後期に発達するといわれているが（e.g., Nelson & Fivush, 2004; Perner & Ruffman, 1995），本研究で，過去形を使った出来事の報告自体は，それより早い，２歳から３歳ぐらいの時期に始まることが示された（エピソード報告開始時期として特定された）。この時期の過去の出来事の報告について，５つの指標との時期的関係性から考察する。

本論文内で「エピソード報告」の定義を，“過去形を使った”過去の出来事の報告としたため，初語時期，二語発話時期を超え，基本的な言語能力を有した段階での初出となった。どの子どもにおいても，この報告が始まったのは，「覚える（もしくは，忘れる）」の自発的使用の開始時期と心的用語「怖い」の理解到達時期よりも前であった。しかも，１人（C）をのぞき，かなり前（６人においては１年かそれ以上前）であった。「知る」の自発的使用の開始時期が，エピソード報告開始時期に近かった点が注目される。幼児期は，大人から手がかりを与えられながら，断片的に過去の出来事に関して話すことが多いため，幼児による過去のエピソードの報告は，過去の経験の明確な想起意識に基づく報告というより，より知識に基づいた報告なのではないかとする説（Perner & Ruffman, 1995; Nelson, 2003; 2004）がある。本結果は，この説を裏づける結果となっているかもしれない。データ数も少なく推測の域をでないが，エピソード報告が始まった頃の２，３歳台では，自己の記憶状況を意識してそれを言語化したり（「よく思い出せない」「くわしく覚えている」など），（感情語への理解が充分ではないため）自己の経験時の心的状況を想起しそれを的確に言語表現することができない段階であり，出来事に関連する手がかりを見聞きしたときに，自分が過去に経験したという明確な想起意識を伴わずに，“知っている”レベルの記憶情報を思いつくままに，断片的に話しているだけなのかもしれない。

今後の課題と展望

今後の課題として以下があげられるだろう。第一に，心的用語の獲得時期と目される幼児期半ば以前と以後でエピソードの語りが，初期の“知っている”レベルの報告から，どう質的に変わり，成人と同様の自伝的記憶の語り，ナラティブが産出されるようなるのか，その変化の過程とそれに関わる要因の追究が次の課題であると思われる。そのためには，もう少し指標を追加して個人内での関係性を具にみていく必要があるだろう。第二に，課題を実施し特定した「怖い」以外の，言語的な認知発達の指標のいずれもが大雑把な指標であったことは否めない。例えば，二語発話は，自立単語が２つつながっている場合と定義したものの，非統語結合発話（Anisfeld, 1984）との区別が明確になされたとはいいきれない。指標の定義を明確にし，保護者の証言と発話データをあわせて詳細に分析する必要があると思われる。第三に，発達過程を探る上で言語能力との関係性の確認は必須だが，今回，一般的な言語能力の指標が足りなかった。従来の研究でも，前述のとおり，一般的な言語能力と自伝的記憶やその語りとの関係性は検討されてきた。その際，経験内容に含まれる単語の理解の有無や，言語理解に焦点をおいた言語発達検査の成績が指標として使用されてきたが，そこでも大雑把な関係性が示唆されているに過ぎない。自伝的な記憶の語りと言語能力との関係性を詳細に検討するには，文法的な指標も含めて指標を増やしていく必要があるだろう。

今回の縦断的調査の結果分析により，過去形で出来事を話すことが可能になる，すなわち（まだ完全な

ナラティブの獲得ではないが）過去を語るための基本的な形式の獲得時期と他の発達指標との時期的関係性が対象者間である程度共通している一方，発達の進み具合には個人差が大きいことが示唆された。本調査結果を出発点とし，認知能力，言語能力の指標の種類を増やし，できれば多くの子どもたちを対象に，同様の縦断的な調査を実施することで，今後，記憶と言語に関する発達のメカニズムを明らかにできたらと考える。

引用文献

Anisfeld, M. (1984). *Language development from birth to three*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Bartsch, K., & Wellman, H. (1995). *Children talk about the mind*. New York: Oxford University Press.

Bretherton, I., & Beeghly, M. (1982). Talking about internal states: the acquisition of an explicit theory of mind. *Developmental Psychology*, **18**, 906-921.

Brown, J. R., & Dunn, J. (1992). Talk with your mother or young sibling? Developmental changes in early family conversations about feelings. *Child Development*, **63**, 336-349.

Cherney, I. D. (2003). Young children's spontaneous utterances of mental terms and the accuracy of their memory behaviors: A different methodological approach. *Infant and Child Development*, **12**, 89-105.

Eisenberg, A. R. (1985). Learning to describe past experiences in conversation. *Discourse Processes*, **8**, 177-204.

Fivush, R. (2011). The development of autobiographical memory. *Annual Review of Psychology*, **62**, 559-582.

Flavell, J. H. (1999). Cognitive development: children's knowledge about the mind. *Annual Review of Psychology*, **50**, 21-45.

Howe, M., & Courage, M. (1997). The emergence and early development of autobiographical memory. *Psychological Review*, **104**, 499-523.

岩田美保 (1999). 幼児における弟の内的状態を表す言葉の発達：弟の意図のくみとりに至るまで. 発達心理学研究, 10, 110-124.

岩田美保 (2013). 園での仲間遊びにおける自他感情言及－３・４歳児クラスでの言及文脈の１年の変化に着目して－. 日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 582.

Johnson, C. N., & Wellman, H. M. (1980). Children's developing understanding of mental verbs: remember, know, and guess. *Child Development*, **51**, 1095-1102.

Limber, J. (1973). The genesis of complex sentences. In T. E. Moore (Ed.), *Cognitive Development and the Acquisition of Language* (pp.169-185). New York: Academic Press.

Miscione, J. L., Marvin, R. S., O'Brien, R. G., & Greenberg, M. T. (1978). A developmental study of preschool children's understanding of the words "know" and "guess". *Child Development*, **49**, 1107-1113.

Moore, C., Bryant, D., & Furrow, D. (1989). Mental terms and the development of certainty. *Child Development*, **60**, 167-171.

Moore, C., Furrow, D., Chiasson, L., & Patriquin, M. (1994). Developmental relationships between production and comprehension of mental terms. *First Language*, **14**, 1-17.

Nelson, K. (2003). Self and social functions: Individual autobiographical memory and collective narrative. *Memory*, **11**, 125-136.

Nelson, K. (2004). Construction of the cultural self in early narratives. In C. Daiute & C. Lightfoot (Eds.), *Narrative analysis: Studying the development of individuals in society* (pp. 87-111). Thousand Oaks, California: Sage Publications.

Nelson, K., & Fivush, R. (2004). The emergence of autobiographical memory: A social cultural developmental theory. *Psychological Review*, **111**, 486-511.

Perner, J., Kloo, D., Gornik, E. (2007). Episodic memorydevelopment: Theory of mind is part of re-experiencing experienced events. *Infant and Child Development*, **16**, 471-490.

Perner, J., & Ruffman, T. (1995). Episodic memory and autonoetic consciousness: Developmental evidence and a theory of child amnesia. *Journal of Experimental Child Psychology*, **59**, 516-548.

齋藤瑞恵 (2000).「知っている」ということについての幼児の理解の発達．発達心理学研究，11, 163-175.

Reese, E. (2009). The development of autobiographical memory: Origins and consequences. *Advances in Child Development and Behavior*, **37**, 145-200.

Shatz, M., Wellman, H., & Silber, S. (1983). The acquisition of mental verbs: a systematic investigation of the first reference to mental state. *Cognition*, **14**, 301-321.

Simock, G., & Hayne, H. (2003). Age-related changes in verbal and nonverbal memory during early childhood. *Developmental Psychology*, **39**, 805-814.

園田菜摘 (1999). 3歳児の欲求，感情，信念理解：個人差の特徴と母子相互作用との関連．発達心理学研究，10, 177-188.

園田菜摘・無藤隆 (1996). 母子相互作用における内的状態への言及：場面差と母親の個人差．発達心理学研究，7, 159-169.

Tager-Flusberg, H. (1989). Putting words together: Morphology and syntax in the preschool years. In J. B. Gleason (Ed.), *The development of language* (2nd ed., pp. 135-165). Columbus, OH: Merrill.

上原 泉 (1998). 再認が可能になる時期とエピソード報告開始時期の関係―縦断的調査による事例報告―．教育心理学研究，46, 271-279.

上原 泉 (2002). 幼児における「怖い」という言葉の理解―内面を表す言葉の理解とは？―．専修人文論集，71, 163-172.

上原 泉 (2003). 第II部　発達－記憶，心の理解に重点をおいて－．月本洋・上原泉著　想像：心と身体の接点（pp.117-182）．京都：ナカニシヤ出版.

上原 泉 (2008a). 思い出の始まり―初期のエピソード．仲真紀子（編著）シリーズ自己心理学４巻：認知心理学へのアプローチ（pp.30-46）．東京：金子書房.

上原 泉 (2008b). 第Ｉ部　自伝的記憶研究の方法 ４章 自伝的記憶の発達と縦断的研究. 佐藤浩一・越智啓太・下島裕美（編著）自伝的記憶の心理学（pp.47-58）．京都：北大路書房.

Wellman, H., Cross, D. & Watson, J. (2001). Meta-analysis of theory-of-mind development: The truth about false belief. *Child Development*, **72**, 655-684.

Wimmer, H., & Perner, J. (1983). Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, **13**, 103-128.

付記

お子様と保護者のみなさまには長期にわたり調査にご協力いただきました。心よりお礼申し上げます。